

陶磁器品評会のはじまり

前田正名と有田五二会

新しい内閣が発足し、平成の高橋是清の手腕や如何にと期待される所ですが、明治のころ官を辞した後全国行脚で産業の奨励に全力を傾けた人に前田正名がいます。彼はこの有田にも深く係わった人です。陶器市が明治29年に始まった品評会に始まることはよく知られていますが、同年3月1日から5日まで本幸平の桂雲寺で開催された「有田五二会陶磁器品評会」が主催したことは意外と知られていません。

五二会とは明治27年殖産興業を唱える前田正名（まえだまさな・鹿児島出身、元農商務次官、貴族院議員）によって組織されたもので、全国の織物・陶磁器・漆器・金属器・製紙、紙製品・雑貨・敷物の7品目の業者が参加しました。当時外国への粗製乱造の商品を輸出する業者が多く、日本製品のボイコットにまで発展しかねない状況を心配した前田は商道徳の高揚によって正常な輸出入を定着させたいと主唱しました。会の活動として報告書や雑誌「産業」の発行、各種地場産業会社の設立、そして五二会品評会がありました。

この前田正名とはいかなる人物でしょうか。彼は嘉

永3年（1850）薩摩藩漢方医前田善安の6男として生まれ15歳で長崎へ藩費留学しています。その後フランス留学中に普仏戦争に遭遇し、大国フランスの敗戦を目の当りにしたことで熱烈な愛国主義者となり、同時に国内産業を盛んにすることで国力充実を唱えたのでした。明治23年5月に農商務次官辞任後、死に至るまでの約30年間を産業奨励活動のために全国行脚を続けました。南船北馬と形容されたこの行脚で全国の産業社会の惰眠を覚ますために積極的な啓蒙活動を行ったのです。この間の前田を「無冠の農相」、「布袋の農相」と称していますが、有田へは明治26年と29年7月11日に訪れています。29年には桂雲寺で有田五二会の会員を前に3時間におよぶ演説を行っています。この有田五二会の代表は深川栄左衛門と田代呈一（有田磁器合資会社社長などを歴任した幸平の窯焼き）の2人で、香蘭社には前田正名が深川栄左衛門を五二会評議員とした時の資料が保存されています。大正期に陶器市を提唱した深川六助とともに薩摩の前田正名の名も陶器市を続けていく上で忘れてはならない人物と言えます。

深川栄左衛門殿
五二会は各業
永遠の利益を
目的とし徳義を
以て組織したるものに
これあり、依つて今般
五二會佐賀県
本部評議員に
特選致し候也、精々御
尽力切望致し候也
二十七年九月
(五二会会頭印)
前田正名花押
香蘭社藏



陶磁器品評会に関しては有田町史陶業編Ⅱ、通史編に詳しく述べられています。前田正名に関しては松永伍一著「日本老農伝」、三好信浩著「近代日本産業啓蒙家の研究」、坪谷善四郎著「実業百傑伝」などあります。また、司馬遼太郎著「余話として」には長崎留学中の前田が坂本竜馬と懇意にしていたことなどが記されています。



皿 山 秋

季刊

No. 39

有田町歴史民俗資料館・館報

期日・平成10年10月10日(土)〜同25日(日)
場所・有田町泉山 有田町歴史民俗資料館

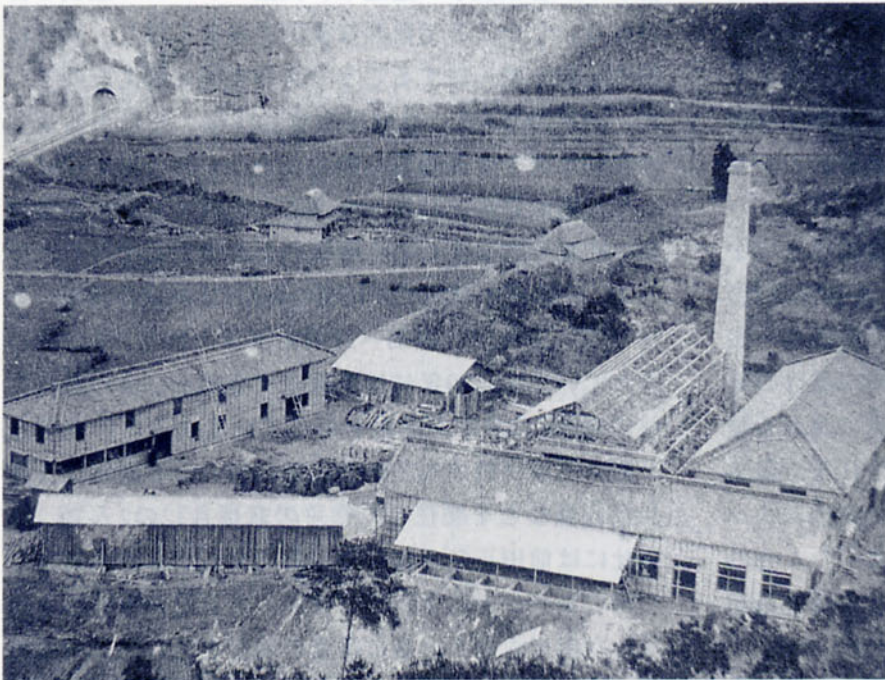
10月18日(日)、昭和初期の有田皿山を撮影したフィルムを上映します。
▼1回目 10時〜 ▼2回目 14時〜



原宿で憩う嫁入りの行列 (明治42年)

藤巻製陶(外尾山)社長藤本寛司さんの祖母ウメさんが佐賀市から輿(こし)入れされたとき。遠い佐賀からこのように歩いて嫁入り道具を運んだ。右端の人家が原宿の端。後ろの山は三角峠。その手前に外尾町の家並みが見えます。

(外尾山・青木安治さん提供)



建築中の有田製陶所 (明治の末期)

有田町史に「上幸平の窯焼き辻勝蔵の長男喜一は大阪の商人和久栄之助と共同し、建築用磁器タイルを主製品とする有田製陶所を上有田駅前創立、やがて和久の単独経営となった」とあります。写真はその製陶所を西から撮影したもので、周囲は田んぼで人家は2、3軒しかなく、左上に鉄道の上有田トンネルが見えます。

(三代橋・和久良一さん提供)

の・としのじょう)でした。彼は写真機と付属品をゆずり受け、写し方を教わりましたが、薩摩藩主島津斉興(なりおき)に献上しました。このとき(天保12年6月1日)上野は斉彬(なりあきら)を撮影したと伝えられ、それをもとに昭和26年からこの日が「写真の日」となりました。最近、この説は誤りらしいと見られていますが、そのまま恒例の記念行事が続けられています。

そうしたことから斉彬は写真に興味を持ち、御用学者に命じて主に江戸藩邸で研究をさせました。それが広がって江戸、長崎、福岡、水戸、大垣、金沢などでダゲレオタイプの写真技術の研究が行われました。

※文久2年(1862)

写真専門館がスタートしました。第1号は長崎市の中島町の上野彦馬(ひこま)の店、第2号は横浜・弁天町に伊豆下田の絵師下岡蓮杖(しもおか・れんじょう)が開いた店です。二人は日本における写真術の開祖と呼ばれています。彦馬は俊之丞の次男で、長崎の医学伝習所でオランダ医師ポンペに化学を学ぶかたわらフランス人から写真術を教わりました。その弟子である内田九一(うちだ・くいち)も明治期の代表的な写真師とされます。明治中期までの写真師は、薬品の調合まで一人でやるのですから習練と科学の素養が要り、医師や弁護士とならぶ高級技術者とされ、高い収入をあげました。

※そして戦後

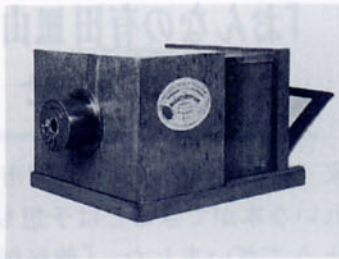
明治の人は「写真の前に立つと命を縮める」といったりしましたが、大正時代には知識人や金持ちの間で写真道楽がはやるようになりました。昭和の初めになると写真機材や薬品が数多く出回り、乾板がフィルムになって技術がたやすくなりました。そして戦後、朝鮮動乱以後に第1次ブーム。二眼レフカメラが愛用され、60年代の第2次ブームから35ミリカメラが中心になりました。さらにシャッターの高性能化、大口径の交換レンズの登場などにより「だれにも写せる時代」になりました。

「わが家の写真」が語る 有田の近・現代史展

有田町歴史民俗資料館はこの10月で開館20周年になります。その記念に館が保存する写真をご披露しようと思います。その際、町民のみならずにもご秘蔵の写真を提供していただき、みなさんと館の共催による写真展にしたらと考えています。「目は口ほどにものをいう」といいますが、1枚の写真がときには長い文章よりも多くのことを語りかけてくれます。また平凡なように見える写真でも、ほかのものと比較されることで、意外な情報をはき出すことにもなります。そんな写真の1枚1枚を構成することによって、明治から平成にいたる、わたしたちの町の足どりが表現できたら、どんなにすばらしいでしょう。どうか、ご協力をお願いします。

ダゲレオタイプ の写真機

天保10年ごろのもの
(朝日新聞社刊「カメラのあゆみ」から)



8代深川栄左衛門

明治期の有田血山のリーダーであったこの人の写真といえは、洋服に鼻ヒゲを生やしたものの(香蘭社蔵)がふつうで、ちょんまげ姿はたいへん珍しいものです。

(稗古場・井口静子さん提供)

◎お写真を貸してくださる方は9月15日までに有田町歴史民俗資料館までご連絡ください。電話は43-2678です。

第1回国勢調査の記念写真(有田村)

最初の国勢調査は大正9年10月に行われました。当時の同村の人口は3854人、戸数は711でした。撮影所は役場前。役場は今の本町の原履物店の所にありました。写真前列右から4人目が館林源右衛門村長。昔の写真は人の名前の分からないのが多いのですが、これは村長以下12人が分かっており、その点でも貴重です。

(外尾山・青木安治さん提供)



カメラ小史

西洋では

ピンホールやレンズを使って像を結ばせる写真機の理論は早くから研究されていました。

※1802年

イギリスの医師トマス・ウェッジウッドが硝酸銀の上に画像をつくる方法を考えました。しかし画像を定着させる方法がわかりませんでした。

※1839年

フランス人で舞台背景の画家だったL・J・ダゲールが銀メッキをした銅板の上に像をむすばせる箱型写真機を発明しました。今日の写真技術の原理がようやく完成したのです。この写真機の彼の名前から「ダゲレオタイプ」とよばれ、8月19日、その成功がフランス政府に報告されました。今日、欧米諸国ではこの日に「ダゲール祭」というお祝いの行事が催されます。

このカメラの登場で、自分の肖像画を画家に描かせるほどのゆとりのない小金持ちの間で、肖像写真を撮ってもらうことがはまりました。ただ20分から30分も同じポーズでいなければならず、また陽画像(ポジ)だったので焼き増しができませんでした。

※1840年

イギリス人科学者ウィリアム・タボットが、軽い感光紙に陰画像(ネガ)を定着させる方法を発明しました。これによって焼き増しができるようになり、「ダゲレオタイプ」はすたれていきました。

日本では

ダゲールが発明した写真機は2年後には早くも長崎の人がオランダ人から買っていました。

※天保12年(1841)

オランダ人がもっている、フォトグラフィをつくるという大きな箱に目をつけたのは長崎の蘭学者で奉行所の御用時計師でもあった上野俊之丞(うえ)



新刊の案内

「枳藪窯・年木谷3号窯」

一町内古窯跡群詳細分布調査報告書第10集一

泉山に所在する枳藪窯及び年木谷3号窯の発掘調査報告書。枳藪窯は1640年代～50年代に操業。小皿を中心に生産。年木谷3号窯は、18～19世紀に操業。30室近くの焼成室を持つ、かつての「泉山本登」。碗類などを中心に、多様な製品を生産している。

88頁 1,570円

「有田の古窯」

一町内古窯跡群詳細分布調査報告書第11集一

昭和62年度から10年間実施してきた「町内古窯跡群詳細分布調査」事業の総括報告書。有田で発見されている50カ所の窯跡の概要を報告。窯跡の位置、規模、性格、年代をはじめ、出土遺物の種類や調査歴、文献などを発掘写真や図面とともに紹介。

381頁 5,250円

「研究紀要」第7集

有田の窯業史に関する論文集。以下の3稿を所収。

「海揚がりの肥前陶磁一玄界灘沿岸を中心に一」

「茂木港外遺跡に関するノート」

有田町教育委員会文化財調査員 野上建紀

「17世紀末から18世紀初頭の波佐見窯業」

波佐見町教育委員会 学芸員 中野雄二

45頁 1,570円

「有田内山の町並み 5年間の記録 1991～1995」

有田内山の町並みについて、平成3年国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されるまでの経緯と、選定後5年間の伝統的建造物の保存修理事業及び保存地区内での公共事業の取り組みについて記録。

九州芸術工科大学教授 宮本雅明 他8名

161頁 非売品

「おんなの有田皿山さんぼ史」

有田の自然、歴史、人物、焼き物などに関するエッセイ集。それに出来るだけ多くの注釈をつけ、また巻末に有田窯業史を学びたい人のためのブックガイドをつけるなどして、最近盛んな郷土学習の手引きになるように編集してある。筆者は県教育委員今泉泰子さんをはじめ有田に縁がある女性22人で、それに芥川賞作家の村田喜代子さんが特別寄稿している。

120頁 1,570円



「おんなの有田皿山さんぼ史」 に寄せて

●芥川賞作家 村田喜代子さん（中間市）

こんなきれいな本ができるとは予想もしませんでした。ありがとうございました。「龍秘御天歌」を書く時に、この本の中のことなどを知ることができたら、もっと窯焼の生活が描けたらうーと、少し残念でしたけど。皆様によろしくお伝えください。

●山口良忠判事を題材にした伝記を文芸春秋から出した函館漢詩文化会主宰 山形道文さん（函館市本町）

筆者ばかりか印刷所スタッフまでも女性であったと知り絶句しました。有田の女性の皆様の知性と感性、そして何よりも誇りの高さに絶賛の拍手を捧げるばかりです。まず表紙の古伊万里「色絵猫抱き人形」に目を奪われました。背景の白磁と呉須の花のイラストがいい。ほどよく映発して詩情を誘います。国際陶磁器界の本山として歴史の重みと文化の輝きです。

●上の番所跡の宅地を町に寄贈された

元東陶機器専務取締役 川浪重年さん（茅ヶ崎市）

生まれながらにして有田の風習・行事のなかで育ちましたので、それらは当り前の事として別段由来など考えることもなく、周囲からの漠然とした知識または誤った知識として身につけていたものが多く、本書によって正しい具体的な知識を得ることができ、大変勉強になっております。

●柴田コレクションの 柴田祐子さん（東京都品川区）

楽しみに待っておりました。柴コレをカットに使って下さってありがとうございます。この本にタッチしたすべての女性に“カンパイ”。

●伊万里市民図書館主任司書 犬塚まゆみさん

有田で作られた食器が日々食卓に並び、有田といえ一番身近かな町だと思っておりましたのに、未知の世界があまりにも多いことを教えられました。知らないということを知ることは恐ろしいことです。

●有田劇場などについての思い出を寄せられた

橋村房野さん（黒牟田）

二宮都水さん宅が近所でしたので帯止めなどを窯から出しておられるのを見ました。窯は幸平のお墓の手前で自宅から離れた所がありました。居間は通りに面して二宮さんは誰とでも気安く話をしておられました。ある日、子どもにさかさ絵を書いてやると鉛筆を走らせました。何の絵か最後まで分かりませんでした。出来上がったのはサンタクロースで、足元から書かれたのでした。相撲が好きで、私の家の上がり口に長くなって寝ながらラジオを聞いておられました。

季刊『皿山』

通巻39号（平成10年9月1日）

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185